

関連学会印象記

第23回日本臨床生理学会総会

今井 真*

第23回日本臨床生理学会総会は、金沢医科大学循環器内科・村上暎二教授が会長をつとめ、10月9日、10日の2日間、金沢東急ホテルを会場として開催された。主催者側によると約1,000人の参加であり、内科、外科、小児科、産婦人科、麻酔科、生理部門、ME 部門などと各分野からの参加がこの学会の特徴といえる。シンポジウム5、特別講演1、一般演題312題の発表があり、臨床生理学会全般にわたっていたが、循環と呼吸が主体であった。特別講演は、国立循環器病センター、菅先生の、「心収縮・拡張と酸素消費」であった。心臓の酸素消費量が左心室圧容積図上で囲まれた面積とよく相関することを、イヌ摘出交叉灌流心を使って理解し易く説明された。結局、エネルギー効率は40%弱であり、陽性変力作用を有する薬物を投与すると収縮性は増加するもののエネルギー効率の面からは高い後負荷と前負荷が必要とされる。

シンポジウムIは「嗜好・習慣および運動の心血管系への影響」で、臨床に最も近いテーマのもとに喫煙・飲酒・コーヒー・入浴等の心血管系への討論が繰りひろげられた。シンポジウムIIは、「重症心不全の治療」であり、なかでも人工心臓・心臓移植に関してはマスコミが特に興味を持つテーマで当日のテレビで早速報映されていた。「肥大大心」のシンポジウムIIIは病理から治療まで幅広い分野から第一線のシンポジストが集められていた。特に肥大型心筋症の発症には異なったタイプの心筋ミオシンが関与するというショッキングなものもあった。遺伝子工学が循環領域においても有用な手段になりつつあることを教えてくれた。シンポジウムIVは「医学における NMR の現況

と展望」であり、急速に NMR 診断が進歩していることがうかがわれた。今後、各臓器の代謝状態をも知ることができらしい。シンポジウムVは「睡眠と呼吸」であり、睡眠時無呼吸が高血圧の引きがねの一つとなることから、注目をあびているテーマである。

一般演題は、6分間の発表であったため、残念ながら十分な討論がなされなかったが、基礎的なものから一般臨床そしてスポーツ医学までバリエーションに富んでいた。冠循環のセッションで、バルーンウェッジプレッシャーカテーテルを用いた冠副血行循環に関する発表があり、閉塞末梢冠動脈圧の維持がはたして冠血管の変化によるものか副行路を介したものであるかの興味深い討論がなされた。低酸素性肺血管攣縮に関しては、エンドトキシン、血小板活性化因子、カルシウムイオンのそれぞれからのアプローチがあった。高頻度人工呼吸に関しても数題まとめて発表があり、呼吸器に関しても内容が高度であるとの印象をうけた。ビタミンEがフリーラジカルスカベンジャーとしてだけでなく、末梢循環不全にも密接に関与しているとの発表があった。麻酔管理に密接に関与する演題に、大動脈の上行または下行枝の狭窄により、左室収縮末期圧-径関係の反応態度が異なるというのがあった。このほか、麻酔科からは各方面に、われわれの2題を含めて9題の発表があったが、麻酔科がもっと関与しても良い学会と感じた。

心電図R-R間隔解析による副交感神経活動の評価に関して5~6題の発表があったが、なぜ周波数分析が副交感神経の活動と関連するののかに關してのメカニズムはわからないらしい。

以上、2日目の午後5時半まで、5つの会場において熱心な発表があった。

*北海道大学医学部麻酔科